

うつすらと登り始めた朝日が水平線を照らす早朝の公園で、わたしは彼に唇を重ねていた。彼のメールが読まれたという興奮に身を任せてしまった結果である。

これは自分のメールが読まれたときを上回る興奮。そして喜ぶ彼の横顔に興奮を隠せなかった。

「水尾さん？」

困惑する彼はわたしの名を呼ぶが、その声はすぐに消えていく。

彼もまたわたしを求めて背中に手を回し、舌を伸ばしてディープキスに移行したことで言葉を失ったからだ。

エンドトークのバックミュージックを務める奏でる水音と鼻息のラブソング。

甘イキというやつなのだろうか、頭の中が嬉しさと気持ちよさでポワポワとしてきて、トークの内容が頭に入らなくなってきた。

「股間にちんこついているよ」

そんな中で捻り出したのは「彼もわたしとのキスで興奮している」という事実の指摘。不意に触れた彼の股間には熱い棒が主張激しくそりたっていた。

これが彼のおちんちんなのかと感心しながら撫でみると、彼の頬は気持ちよさそうに震えていた。

そんな顔をされたらもっと好きになつてしまふではないか。

「ついていていいでしょ」

「うん……」

顔の赤らめが最高潮に達した彼はそう言うと、わたしを抱きしめるのを中断して突き放つ。

そしてベンチから立ち上がった彼はズボンを脱ぐと、見せつけるかのように股間のイチモツをさらけ出した。

薄明かりの下で武装色の用に黒く見える彼のちんこ。

ゴクリと生唾を飲みながら、わたしも誘導されているかのように自然とズボンを脱いで彼に己をさらけ出してしまふ。

わたしの股間にはちんこはない。

うっすらとした陰毛で陰唇も薄くスジに近い。

「わたしはついていないよ」

そしてわたしが彼のちんこに釘付けなように、彼はそんなわたしのまんこに釘付けのようだ。

しばし互いに相手の性器を見せあった後、ベンチに座った彼のリードに従って、わたしは彼の上に跨つていった。

初めてなのに手慣れた対面座位はキスしながらハメるための姿勢。

見せっこの時点で太ももによだれを垂らすくらいに濡れていたわたしのモノはあんなに凶悪そうな彼のモノをするりと飲み込んでいて、繋がっているだけで頭の中がパチパチするくらい気持ちがいい。

こんな状態でキスまでして上下の口が彼で満たされている。

初めてでまだ彼はイっていないのに一人で先にイキまくっているこの状況はまるでわたしと彼のラジオ投稿者としての差のようだ。

早くわたしに追いついてほしい。

早くわたしでイってほしい。

誰にも見せたことのないとろけた顔で、隠すことすら不可能な状況で「彼のことが好き」と叫ぶようなキス。

次第に強まる彼のピストンは絶頂が近いのだろうか。

このままもつと突いてほしい。

突き上げるたびにイカされながら懇願するわたしの膣内で、彼はようやくイってくれた。

「射精る！」

ご丁寧に予告はするが避妊の類いはしていない。

そのままわたしの中で爆ぜた彼のちんこは滝のような勢いでわたしの膣内を精液で満たしていく。

射精もおさまり、勃起もおさまり、彼のモノが引き抜かれる頃にはわたしのお腹は精液を飲み干して溢さな

い。

シラフに戻ったわたしたちはそそくさとズボンを履きなおすと、誰も来ないうちに公園を立ち去り帰路に就いていた。

---

と言うのはもちろん夢の話。

正確には昨日のことを反芻しながら自慰にふけたわたしの妄想にすぎない。

昨夜はオナニーしたあとすぐに寝ていて手を洗っていなかったのも、指先には愛液が乾いた匂いが染み付いている。

これはウェットティッシュで拭いた程度では落ちないだろう。

だがその匂いがまるで彼の精液の匂いに感じられて、わたしは朝から少し盛ってしまった。

危うく遅刻しかけたし、なんなら焦ったままに見た現実の彼にドキンときてしばらくポワポワになってしまったのは秘密である。